

様式 1

令和 7 年度学校評価報告書
渋谷区立笹塚中学校

令和 7 年度 学校評価報告書

令和 8 年 2 月 3 日
渋谷区立笹塚中学校

(1) 子ども主体の学校づくりの推進**【ア】 自己評価**

重点目標		①安心して意見を表明できる学級・学校風土を醸成する。 ②生徒が「自ら考え、選び、決定する」学習を充実させる。 ③生徒の自己調整力・主体的な生活習慣を育成する。		
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果
①	・アンケートにおいて「学校やクラスのためになることを頑張っている」を 80%以上とする。	・学級での対話（話し合い・協議）の時間を計画的に設定し、多様な意見や考え方を尊重する学級経営をした。 ・教職員自身が対話的・協働的な姿を示した。	B	アンケート結果において肯定的に回答した生徒は 70%程度であった。仲間と協力し、思いや考えを大切にする力が育っている。日々の授業や学級活動の中で、話し合いや協働的な活動を積み重ねてきた成果である。
②	・アンケートにおいて「自分のペースで理解しながら学習を進めることができる」を 80%以上とする。	・学習方法や成果物、発表方法を生徒自身が選択できる授業に転換するとともに、振り返りを重視し、学びを言語化する習慣づくりをした。	B	アンケート結果において肯定的に回答した生徒は 70%であった。探究学習を中心に取組んできたが、各教科等においても一層取組を強化する必要がある。
③	・アンケートにおいて「自分で考え、自分から取組んでいる」を 80%以上とする。	・学校生活全体を通して「自分で判断し、責任をもつ力」を育てるため、学習面・生活面における目標設定と自己評価を習慣化した。 ・時間管理・健康管理・人間関係づくりを支える指導を充実した。	B	アンケート結果において肯定的に回答した生徒は 70%程度であった。生徒が判断する場面は増えてきているものの、その判断が実際に反映された経験や、結果に責任をもったと実感できる機会が十分ではなかったため、発達段階等に応じた「任せ方」を工夫する必要がある。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
B	B	生徒が安心して意見を表明できる学級・学校風土づくりや、主体的に学ぶ姿勢を育てようとする取組は、日常の授業や学級活動を通して着実に進められていると評価できる。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(2) 新たな学びの実現

【ア】 自己評価

重点目標		①生徒の学ぶ意欲を醸成する。 ②ICT を効果的に活用した学び合いのある授業を推進する。 ③シブヤ未来科の探究学習を充実させる。		
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果
①	・アンケート「自ら進んで学習に取組んでいますか。」において肯定的な回答を 80%以上とする。	・生徒が興味や関心をもって、主体的に学ぶことができるよう働きかけ、学習者用デジタル教科書や各種アプリを活用した。	A	アンケート結果において肯定的に回答した生徒は 80%を超えていた。学習に前向きに取組む基盤が形成されてきているものの、学習のねらいや成果を可視化し、達成感や成長実感を得られる学びの工夫を一層進める。
②	・アンケート「学習者用端末を活用することで仲間と協力しながら学習を進めることができる」において肯定的な回答 80%以上とする。 ・アンケート「学習者用端末を効果的に活用している」において肯定的な回答 80%以上とする。	・ICT を活用することにより、思考の比較や協働編集により、学びの可視化をした。	B	アンケート結果において肯定的に回答した生徒はいずれも 80%程度の肯定的回答を得ている。生徒同士が考えを共有し、比較しながら学ぶ姿勢が高まりつつあるものの、「比較する・統合する・よりよい考えを創出する」段階へと高める授業設計をする必要がある。
③	・アンケート「シブヤ未来科の学習を推進している」において肯定的な回答を 80%以上とする。	・「シブヤ未来科」において、多くの情報から何が必要で大切かを判断し、他者と協働しながら問題を解決し、新たな解決策や価値を生み出すことができるよう授業を開拓した。	A	アンケート結果において肯定的な回答が 80%を大きく上回った。探究学習の成果が学校や地域の改善、実社会への貢献として実感されにくい状況がある。「調べてまとめる」段階にとどまらず、社会に働きかける経験までに至る工夫が必要である。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	学びの成果を社会や地域に還元する経験を重ねることで、学習の意義をより実感できる取組となることを期待したい。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(3) 安心・安全に挑戦できる環境

【ア】 自己評価

重点目標		①いじめ問題への意識を高くし、未然防止に努める。 ②すべての生徒が、安心して挑戦できる環境づくりを構築する。 ③自分の人権を守り、他者の人権を守るために実践行動ができる。			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	・いじめ対応に関するアンケートにおいて、肯定的な回答を 80%以上とする。 ・いじめのない安心して通学できる学校づくりを目指す。	・いじめ防止に関する授業を展開するとともに、校内委員会において ICT を活用した情報共有を行い、組織的に対応した。 ・いじめアンケート・生活アンケートを隔月実施し、聞き取りを随時行った。また、いつでも相談できる教育相談体制を充実させた。	A	アンケート結果において肯定的な回答が 80%程度となり、いじめ対応に関する周知や理解が一定程度進んだ。教職員研修を充実させ、小さなトラブルにも丁寧に対応し、組織的な対応を実践してきた結果である。	B
②	・アンケート「安心して学習に取り組める」において肯定的な回答を 90%以上とする。 ・不登校の生徒の状況を把握するとともに、適切な支援を行う。	・生徒間のコミュニケーションを促進し、互いに尊重し合うことができるよう、グループや班での協働的な活動を取り入れた。 ・不登校対策委員会を開催し、個々の生徒の現状把握、対応方法について、組織的に対応した。	B	アンケート結果において肯定的な回答が 80%超であった。生徒が自分の存在や考えを肯定的に受け止めることができており、失敗を過度に恐れずに行動するための心理的安全性が学校全体で一定程度確保できた。	B
③	・学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりを組織的かつ効果的に推進する。	・「生徒の自尊感情を高める指導の充実」を通して、誰一人取り残さない教育活動を展開した。また、地域の行事に積極的に参画し、学校と地域が協働して、自他ともに大切にしようとする態度を育んだ。	B	アンケート「自分にはよいところがあると思う」に肯定的回答した生徒が 90%を超えており、自己肯定感の面でも着実な伸びがみられた。自分に自信をもち、前向きに学校生活を送る生徒が増加している。	A

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
B	B	いじめの未然防止や早期対応に向けた組織的な取組、ならびに生徒が安心して学校生活を送れる環境づくりは、継続的に実践されており、一定の成果が認められる。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(4) 校務DX（働き方改革）

【ア】 自己評価

重点目標		①校務 ICT 化の推進による教職員の負担軽減 ②会議等の精選と意識改革 ③ペーパーレス化の推進			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	・アプリを活用した学校だよりの配信などを充実し、印刷業務等を軽減することで、生徒との面談や授業準備などの時間を確保する。	・学校や PTA からのお知らせは原則、Home&School を使って配信した。また、校内の連絡事項も Teams を活用したデータ配信を徹底した。	A	ICT を活用することで集計業務等の負担が着実に軽減した。また、アプリによる欠席連絡が定着し、勤務時間前の電話応対が軽減した。学校からの配信を確実に全員受信してもらうための周知と協力を、継続的に行う。	B
②	・運営委員会における報告を、全教職員が理解するとともに、校内委員会等における情報共有を徹底する。 ・TLDにおいて、教員の学びの機会を確保する。	・参加していない会議については、教員が主体的に情報取得に努めるとともに学年の会議において周知した。 ・新たな学びの推進やシブヤ未来科の探究学習に関する取組を継続的に実践した。	B	設定時間内で会議をすることで生まれた時間は、研修会や教材研究、生徒会活動等に活用された。「学校生活の課題を見つけ、課題解決に向けて努力することができる」は 80%と、多くの生徒が課題を自分事として捉え、考えようとする姿勢をもっている。これは、問い合わせ立て、調べ、考える経験を積み重ねてきた成果である	B
③	・生徒、保護者のペーパーレスの意識を定着させ、アンケート結果の肯定的評価を 80%以上とする。	・学校だよりや保護者へのお知らせ等は Web サイトを活用して発信した。 ・各教科等の授業において、ペーパーレスの観点より可能な限りデジタルに移行した。	B	アンケート結果において肯定的回答は、保護者が 90%超であったが、生徒は 70%にとどまった。ワークシートの「考えを書く→共有する」場面や振り返り、話し合いのまとめ・意見集約などはデジタル化することを徹底する。	B

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
B	B	校務の ICT 化やペーパーレス化により、教職員の業務負担軽減が着実に進んでいる点は高く評価できる。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(5) 家庭・地域との協働

【ア】 自己評価

重点目標		①学校運営協議会との連携と協働 ②保護者との連携強化 ③社会に開かれた教育課程の実現		
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果
①	・「学校運営協議会」についてのアンケートにおいて肯定的な回答を 80%以上とする。	・学校運営協議会を年 6 回開催した。 ・学校への具体的な支援や意見についてすぐに校内で共有し、情報発信に努めた。 ・協議内容を教職員及び保護者、地域に学校だよりを活用して周知した。	B	アンケート結果において肯定的回答は 60%程度で、「わからない」と回答が 20%であった。7 月に、地域住民と教職員との熟議を行い、課題について討議することにより、互いの立場や果たすべき役割への理解が深まった。保護者の参画を促し、当事者意識をもって教育に関わることができるように工夫する。
②	・「家庭・地域の理解と協力を得た教育活動」についてのアンケートにおいて肯定的な回答を 80%以上とする。	・学校ホームページなどを活用して生徒の取組や功績を配信した。行事ごとにアンケート機能を活用して保護者からコメント入力してもらい、日頃から保護者との連携を強化し、良好な関係づくりに努めた。	A	アンケート結果において肯定的回答は 80%超であった。特に、ホームページの学校日記を毎日更新するなど情報提供に努めた。しかし、情報提供は一方通行になりやすいため、家庭からも発信できる環境を一層充実したい。
③	・「地域との連携」についてのアンケートにおいて肯定的な回答を 80%以上とする。	・町民大運動会、地域防災訓練、笹幡フェスティバルにボランティアによる生徒が主体的に参加した。	B	アンケート結果において肯定的回答は 50%未満であった。生徒の主体的な参画により、地域へ貢献することができたが、学校行事と地域行事が連続するなど生徒や教職員の負担を考慮した持続可能な取組にする必要がある。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
B	B	取組の内容や意義が十分に伝わっていない面も見受けられるため、保護者や地域がより主体的に参画できる仕組みづくりを進めることで、協働の質がさらに高まることを期待したい。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(6) 特色ある教育活動

【ア】 自己評価

重点目標		①デジタル・シティズンシップ教育の充実を図る。 ②日本の伝統的な文化「稲作体験」を実践する。 ③安心・安全な学校をつくる。		
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果
①	・「デジタル・シティズンシップ教育」「メディア活用」に関するアンケートにおいて、肯定的な回答を 90%以上とする。	・情報の受け手・発信者としての責任を意識させるとともに、どう使えば学びや社会にとって有益かを考えさせる場面を重視した。 ・ICT を活用した協働編集や意見共有の場面では、他者の考えを否定せずに受け止め、よりよい考えにまとめていく学習を意図的に設定した。	B	アンケート結果において肯定的回答は 80% 程度であった。協働的な学習の定着や、自分の意見が周囲に影響を与えるという実感の向上など、行動や意識の面で一定の成果が確認できた。今後も、教科横断的な取組を通して、デジタル社会の一員として主体的に行動できる生徒を育成する。
②	・「家庭・地域の理解と協力」「学校の特色」に関するアンケートにおいて、肯定的な回答を 80%以上とする。	・調布農園、地域、PTA、おやじの会と連携し年間を通して実践する。 ・1年生はもみ蒔き、田植え、2年生は稲刈り、3年生は餅つきを実践した。	A	アンケート結果において肯定的回答はほぼ 80%程度であった。特に、稲作体験活動を持続可能なものにするためには、保護者の参画や協力が不可欠である。今後も、学校行事の周知と理解を深めることができるよう努める。
③	・『「物理的安全」とともに「心理的安全」の確保に努めた』に関するアンケートにおいて、肯定的な回答を 80%以上とする。	・校内施設・設備の定期点検および危険箇所の早期改善、避難訓練・防災訓練の計画的実施と振り返り、登下校時の安全指導等を実施した。 ・意見の違いを尊重する指導の徹底とともに、困り感や不安を早期に把握するための面談・相談体制の整備を充実させた。	B	アンケート結果において肯定的回答は 80% 程度であった。さらに「学校に行くのは楽しいと思う」と肯定的回答したのは 9割近くあった。生徒が安心して学び、挑戦できる環境が着実に整いつつある。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	これらの特色ある取組を教科横断的・継続的に発展させるとともに、保護者や地域との連携を一層深めることで、より実感を伴う学びへつながることを期待する。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない